

入学前課題 講評（国際文化学域）

池上俊一著『森と川—歴史を潤す自然の恵み』

河合祥一郎著『シェイクスピア—人生劇場の達人』

内藤正典著『ヨーロッパとイスラーム—共生は可能か』

全体の約半数弱が『シェイクスピア』を選択、『ヨーロッパとイスラーム』がそれに続き、『森と川』を扱った論考は少数でした。昨年 2016 年はシェイクスピアの没後 400 年というアニバーサリー・イヤーであったこともあり、ミュージカルや宝塚などで作品が取り上げられるなど、イギリス文学に親しんでいなくても 4 世紀も前に英国で活躍した劇作家の名前を耳にする機会があったからかもしれません。またイスラーム諸国と欧米諸国の関係、そしてムスリム難民・亡命者・移民の流入が引き起こす摩擦、原理主義が今日の世界情勢に与える影響については、みなさんも無視することができないと感じているのではないのでしょうか。その一方で、環境学への歴史的アプローチは上記ふたつの主題と比べると地味な印象を与えるかもしれませんが、人類が直面する最大の課題でもある環境問題に歴史学・人文学はどのような貢献ができるかを示しているといえるでしょう。

どの本も今日の人間社会の有様について考察する機会を与えてくれる、自分の身に引き寄せて考えることが可能な課題でした。実際、そのようなアプローチが多数見られましたが、とはいえ「わたしの心の中の真実を見つめていきたいと思う」「大学でしっかり学んでいきたい」「世界のひとりひとりに（ムスリムとの、自然との）共生の努力が求められている」といった大多数のみなさんの結論を見ていると、はたしてみなさんは本当に「本を読んだ」のだろうかという疑問に感じざるをえず、これからみなさんと学ぶ日々を待つ者としては少なからず意気をそがれる思いがしました。

というのも、上に挙げたような「道徳的感想」あるいは「正しい意見」にたどり着くためには、わたしたちはこれらの課題図書を読む必要がまったくないからです。もしみなさんが大学での学びとは、あらかじめ正しいと規定された倫理的態度の表明に、具体的な主題（シェイクスピア、イスラーム世界、森と欧州文明）をなぞり合わせる行為に過ぎないと想像しているのであれば、それは大学での学びをあなたにとっての大きな誤解であり、みなさん自らの成長の可能性をすすんで摘み取る行為だといってよいでしょう。それでは大学で学ぶ楽しみを味わうことはできません。

高校までのみなさんは試験という形で「あらかじめ与えられた問い」に「正しい答え」を返すことを繰り返すうちに、それがあたかも「学ぶこと」であると思いこんでしまっているかもしれません。大学へ進むに当たっては自分で問いを見つけること、そのために他者の声に耳を傾けることが求められます。

「本を読む」とき、わたしたちは「他者」に直面し対話することを求められます。「他者」とは「イスラーム世界」といった新たに直面する主題だけでなく、それについて研究を重ねみずからのことばで読者のみなさんとコミュニケーションしようとする著者をも指します。本を読んで自分の考察を述べる行為は、単に最初から最後まで本に目を通したこと

を証明するために要約と感想を並べることはありません。わたしたちに語りかけてくる「本」「著者」を受け止めて、自分なりの問題意識を形成し、それにそって情報を収集し、根拠を示しながら、自らの考察を論理的に述べる作業です。課題図書のみを読めば済む作業ではないのです。

以下、細かいけれども大切な点についても指摘しておきます。

どの課題図書を扱っているのかわからない文章が少なからずありました。3冊のうちの1冊を選んで論ずるという形式上、自分が何をあつかっているのか最初に述べるのが読者という他者に対面する際の礼儀というものです。

敬体文の論文、敬体と常体がまざりあった論文がちらほら見られました。学術的な文章では常に常体「～である、～だ」を使います。

参考文献を明記しましょう。課題図書以外に何も読まなかった人はこれからはそのようなことがないように。

フォーマットを遵守しましょう。字数が極端に少ないもの、句読点が行頭にあるもの、段落の頭の字下げができていないもの、手書き原稿でないのに原稿用紙フォーマットに書かれたもの、1文ごとに改行されポエムのような体裁のもの、誤字脱字が散見されるもの、などなど、時間をおいて一度読み直しさえすれば改善できる問題点が多数見受けられました。人に読まれるのだということを意識してください。ひとつの課題が完了するのは初稿を書き終えた瞬間ではありません。見直しの時間も含めて作業に必要な工程や時間を正しく見積もれる力も求められています。

以上